

2024 年度 第 2 回 亀田医療技術専門学校 教育課程編成委員会議事録

日時：令和 6 年 11 月 25 日（月） 15：00～16：30

場所：亀田医療技術専門学校 2 号館 3 階 301 教室

出席者

教育課程編成委員

- ・ 鴨川市市民福祉部長 鈴木 克己
- ・ 亀田総合病院看護管理部副部長 安田 友恵
- ・ 千葉県看護協会安房地区部会役員 栗田 みよ子

専門学校教職員

- ・ 学校長 大塚 伊佐夫
- ・ 副学校長 吉田 広美
- ・ 看護学科教育主任 関根 恵子
- ・ 看護学科教育副主任 新井 淳子
- ・ 事務長 大塚 努

敬称略

司会：吉田副学校長 書記：片桐

委員会次第

1. 開会、資料確認

吉田副学校長が司会を務め、資料 1、2 の有無を確認。

2. 出席者の確認

全員の出席を確認した。

3. 大塚学校長挨拶

「今回の議題は 2 つありますが、外国語Ⅱの国際交流について学生の減少などで難しい現状があります。皆さんにご意見をいただきたいと思います」と挨拶した。

4. 報告

1) 地域・在宅看護論の学びについて（資料 1）

令和 5 年度から新規カリキュラムとして施行

学習目的：地域で生活する個人・家族を看護の対象として、生活の基盤である「地域」を理解し、自分の望む健康や暮らしを支援するための基礎的能力を養う。

昨年度の教育課程編成委員会で検討課題が出されたため、それをもとに本年度の取り組みに反映をさせた。

< 課題 >

①暮らしを知る上での歴史・文化・地形は「地域・在宅看護論Ⅰ」で履修するように再編成する。

②フィールドワークで見学する各施設担当者に、暮らしの場の理解が深まる質問ができるよう支援していく。

③地域で暮らす人々と接して、自助・互助・共助・公助の視点で考えられるように授業設計を再編成していく。

▼令和 6 年度 46 期生対象

◆地域・在宅看護論Ⅰ（1 年次 4～5 月履修 15 時間）

授業構成：第 1～5 回は講義およびテーマに沿ったグループワーク／第 6 回は仮想事例に沿ったグループワーク／第 7 回は発表

◆地域・在宅看護論Ⅱ（1 年次 6～9 月履修 15 時間）

授業構成：第 1～4 回は講義／第 5 回はグループワーク／第 6～7 回はフィールドワーク／第 8 回はフィールドワークを通じたグループワーク（地域マップの作成）／第 9 回は地域マップを基に各グループの発表

科目目標：1. 暮らしの場に出向き、人の暮らしについて知ることができる。

2. 地域で暮らす人々と対話を通して、地域で暮らすための支えていく仕組みを理解できる。

3. 暮らしの中での人と人とのつながりを考え、看護の役割について理解できる。

フィールドワーク履修目標：

1. 地域を探索することで、鴨川市に暮らす地域住民の特徴と暮らしについて知ることができる。

2. 鴨川市の文化や歴史、産業、地形、環境、交通、医療、福祉を知り、鴨川市の特徴を知ることができる。

3. 地域包括ケアシステムを自助・互助・共助・公助の視点から、地域を担う鴨川市地域住民への支援について知ることができる。

クラス別で午前・午後 2 コマを利用しフィールドワークを実施。

科目目標 2 を基に、フィールドワーク履修目標を掲げ、見学施設を通して学ぶ。（見学施設：鴨川市役所、郷土資料館、観光協会、社会福祉協議会）

▶新規授業構成「地域・在宅看護論Ⅱ」第 5 回

〔1〕 フィールドワークに備えてキーワードとなる内容の調べ学習を課した。

〔2〕 フィールドワークに備えて鴨川の地域性を知るためグループワークを組み入れた。

〔3〕 仮想事例の提示をフィールドワーク後とした。（事前に提示すると事例に沿った内容に意識が向き質問事項に片寄りが生じるため）

〔4〕 観光協会は現地訪問ができなかったため、9/3 に職員の方に来校していただき聴講した。

課題①「暮らしを知る上で歴史・文化・地形は「地域・在宅看護論Ⅰ」で履修するように再編成するへの取り組み

- ・科目の成り立ちより、「Ⅰ」では人々の暮らしの理解に重点を置き、「Ⅱ」では人々の暮らす地域の理解に重点を置く。暮らしを知る上での歴史・文化・地形は、暮らしの場の地域性であることから、再編成せずに「Ⅱ」で履修することとした。

課題②「フィールドワークで見学する各施設担当者に、暮らしの場の理解が深まる質問ができるよう支援していく」への取り組み

- ・教授整備（改善）： 学生が思案した質問内容を教員が事前に確認した。市民の家族世帯や支援の多様性、暮らしの実態や現状を施設担当者から聴き、質問をするよう学生に説明した。
- ・成果： 令和 5 年度に比べ鴨川市に暮らす人々への支援状況を、課や部署の役割を踏まえた現実的な質問をすることができていた。

課題③「地域で暮らす人々と接して、自助・互助・共助・公助の視点で考えられるように授業設計を再編成していく」への取り組み

- ・教授だけでは地域包括ケアシステムの学びの理解は難しい。後期開講の「社会保障制度」の繋げ学習を期待する。学びが深まるのは 3 年時の領域別実習のため、「Ⅱ」で地域包括ケアシステムの基礎（概要と構成の意味）を受講し、具体的な履修としてフィールドワークを通して、地域の方々の暮らしの実態や支援内容を学修していく。
- ・授業設計は大きく変更していないが、学生の理解につながった要因の一つは、教授側が社会福祉行政の理解を深めたことと捉えている。

授業評価アンケート回答率 58%（29／50 人）

- ・講義における自己評価では「興味のある科目であった」「主体的に授業に臨むことができた」に対し、回答者全員が「当てはまる・非常に当てはまる」と回答し、関心を持って授業に臨むことができた結果となった。
- ・講師に対する評価では「今後役立つと思われる内容」「看護の仕事には重要であることが伝わった」「講義の中に問題提起は考えさせられるものであった」「課題の内容は重要と思われた」で「当てはまる・非常に当てはまる」に回答者全員が回答しており、高評価であったと考えられる。

・交通手段など

当日天候が悪く、車所有者に負担をかけた。交通手段がなく、タクシーやレンタカーを使用すれば費用が掛かる。今後、どうすべきかの検討が必要であり、課題が残る。

・実施時期について

今年度、7 月に花火大会を控えていた関係で観光協会に伺うことができなかった（後日来校してお話をいただいた）。鴨川市の事業予定をあらかじめ確認し、調整を行い、依頼していく。

・地域・在宅看護論Ⅱの科目目標の検討

フィールドワーク時に地域で暮らす人々との対話の内容を把握し、まとめの発表に活用していくよう調整を図っていく。一方でフィールドワークといった初対面の状況で暮らしについて尋ねて聞いていくことは困難な面も推測される。デイケアやサロン、公民館活動など場面設定された中でのインタビューは、参加者と学生の双方が安心・安全な環境のもとで話ができる。

科目の履修時間が 1 単位 15 時間（全 7 コマ）のため、地域での暮らしの在り方を社会福祉行政の体制や仕組み、支援について重点を絞ってもよいのではないかと考える。

2) 外国語Ⅱ 国際交流の学習状況について（資料 2）

科目目標： 1. 異文化を知り、異文化に対する変え方を深めることができる。

2. 外国の保険・医療・福祉制度の状況を知り、日本との違いを理解できる。

3. ホームステイで英会話を実践し、言語の異なる人との交流がもてる。

実施場所は例年カナダであったが、渡航費の高騰などで、今年度からオーストラリアに変更をした。

▶令和 6 年度履修状況

1. 2 年生 70 人（現地 40 人、学内 30 人）

昨年は現地 68 人で学内 8 人だった。今年度、旅行に参加しなかった理由の 6 割が金銭面の問題である。

2. 現地スケジュール 10 月 29 日～11 月 4 日（4 泊 6 日）

- ・オーストラリアの医療と福祉のセミナー
- ・現地オーストラリア人の現役看護師（助産師）からの講義
- ・シドニーホスピタル内ルーシー・オスバーン ナイチンゲールミュージアムを訪問
- ・シドニー・ナースング・スクール講義
- ・クリス・オブライエン・ライフハウス（がん治療センター）視察
- ・シドニー大学遺産視察
- ・ホームステイ（2 泊 3 日）

3. 学内

- ・英語で自己紹介
- ・オーストラリアの特徴、医療、現地研修先について、グループで学習した内容を発表
- ・先進、発展途上国から各 11 を選択し、特徴・医療・看護・福祉・健康問題について自己学習
- ・自己学習をもとに、世界の医療情勢の違い、抱えている問題について考察し、レポートおよび資料を作成し発表

評価

- ・オーストラリアは多文化共生社会に基づく包括的コミュニティーを形成しているため、異文化を知り、考え方を深める海外研修として相応しい場所である。
- ・日本とオーストラリアでは看護職のたどるルーツにつながりがあるため（フローレンス・ナイチンゲール）、慣れ親しみやすく看護職の歴史や情勢の関心が高まる。
- ・日本とオーストラリアでは人口動態の推移や文化的背景、高まる好発疾病の罹患率が類似していることから、保険・医療・福祉制度の取り組み状況や違いの見聞を広め学びの理解が深まる。
- ・ホームステイ先で英会話を実践し、交流を通して、人の温もりや優しさに触れ、人を敬い尊重する気持ちが芽生え、思いやりのある言動がみられるようになった。

課題

- ・教科科目の位置づけである海外研修であるが、費用の高騰により学生および保護者の経済的負担が増し、参加を断念する学生が多くみられた。（今回の費用 418,000 円）

5. 討議

地域・在宅看護論について

・学生が市民の方々とコミュニケーションをとるのが難しいと考える。事前に対話の場を用意したほうが良い。婦人会などの方ならきちんと話をしてくれるのではないか。（安田委員）

・学生の中には鴨川出身ではない者もあり、地域の人と話をすることが少ない。施設に伺った際に、市民の方々と話をしていくようにと送りだしたが、実際は雨でほとんど人がいなかった。

（関根教育主任）

- ・学生自身が話しかけた方に、どうしてこのようなことをやっているかなど、授業内容や自分たち

のことを説明しなければならない。リーダーシップを発揮できる人がいないと難しいのではないかな。

(栗田委員)

・フィールドワークは、どこで地域の方とコミュニケーションをとるのか。(吉田副学校長)

・グループごとに分かれ、鴨川市役所、郷土資料館、社会福祉協議会にお伺いし、施設の方にお話を聞いた。施設の方は学生のため準備をして待っていてくださった。(関根教育主任)

・施設に向かう途中、市民の方々に話しかけることを想定していたが、雨のため人がいなかった。(新井教育副主任)

・実際問題として、市内にはなかなか人が出歩いておらず、車を止める場所もないのではないかな。(栗田委員)

・公民館での集まりや婦人会などに参加している方々に話を聞くのが、お互いが安心・安全なのではないかと思う。(新井教育副主任)

・市内において、そのような場があるのか、また学生を受け入れてもらえるものなのか。(吉田副学校長)

・大学では定期的に認知症カフェ(はななカフェ)を行っているが、そこに参加してみてもどうか。(安田委員)

・授業内容が認知症カフェの趣旨目的に合えば、参加することは可能である。(大塚事務長)

・しかし土曜日開催など、授業日程を開催時に合わせるのが難しい。(吉田副学校長)

・看護協会主催の催しものに参加してはどうか。看護師や市民の方も多く来場されるため、ブースなどを立てやってみるのもよいかと思う。(栗田委員)

・社会福祉協議会が主となって、福祉や防災に特化した催し、フェスティバルを行っているので、参加してみてもどうか。(鈴木委員)

・催しなどに積極的に参加される方はコミュニケーションが取れる方が多い。そのため学生も話しやすいのではないかな。(安田委員)

・質問を作る際 QFT (The Question Formulation Technique) という質問の質を高める方法がある(目的を決め①質問を多く出す②オープン、クローズの質問を分類し、質問の価値を検討し、改善する③質問に優先順位をつける④質問をどのように使うのか考える⑤質問づくりを振り返る)。現実的な質問とあったが、必ずしも現実的な質問が正答であるとは思わないので、質問づくりをしてみるのもよいかと思う。(大塚事務長)

・交通手段が安全面も含めて課題となるのではないかな。(安田委員)

・徒歩の学生もいたが、雨だったため人に出会えなかった。(新井教育副主任)

・この辺りを歩いても出会える人は患者様や市外在住の人が多いのではないかな。(栗田委員)

・時間内に到着しなければいけないという時間の制限・制約もある。(新井教育副主任)

・人が集まる所や行事に学校側が意図的にお願いしていく必要があるのではないかな。またこちらが来ていただくような企画をしても良いかもしれない。大学では NPO 子育て広場ほっと主催の子育て世帯に向けたまちづくりカフェというのがあり、助産の学生がボランティアで参加させていただいている。(吉田副学校長)

・市の広報誌に行事案内等を掲載することはできるのか。(安田委員)

・「かもがわ」は1日、15日発行であるが、それぞれの締め切りに間に合うようであれば掲載も可能ではないかと思う。(鈴木委員)

・SNS 等で流す方法もあるが、お年寄りなどには届きにくい。(栗田委員)

- ・話を聞く人の年齢は何歳ぐらいを対象としているのか。(鈴木委員)
- ・事例として小児、高齢者、成人家族、障害者、漁業従事者などを考えていた。(新井教育副主任)
- ・実際、病院での実習時でさえ患者様の情報を知っていたとしてもコミュニケーションを取るのが難しい。助産学科の学生でも、初めて継続事例の方と関わる際には教員とシミュレーションを行ってから臨ませなくてはならない学生もいる。(吉田副学校長)
- ・学生をベッドサイドに連れていくと、患者様も話がしやすいわけでもないので、こちらが話をし和ませてからでないと、その場を離れられない。(栗田委員)
- ・新人の看護師さんも話は聞くことをできるが、それを広げることが難しいと考える。(吉田副学校長)
- ・お話をすることに慣れた人、慣れた環境でないと会話を進めていくのは難しい。(栗田委員)
- ・学生は積極的に年が離れた人と話すことができない世代だと考える。今どきの学生受けするようなコミュニケーションスキルを体験させることを検討している。(吉田副学校長)
- ・1年次に人間関係論の授業でコミュニケーションとカウンセリングを学んでいる。(関根教育主任)
- ・メールやチャットではきちんとした文章を書けるが、会話や話すことに慣れておらず、対面での報告がきちんとできない人もいる。(栗田委員)

外国語Ⅱについて

- ・科目としては継続していく予定なのか。(安田委員)
- ・検討の余地があると考えている。(吉田副学校長)
- ・大学も海外研修への参加者が少なくなっているようだ。(安田委員)
- ・大学は今後、選択制になっていく予定である。(大塚事務長)
- ・先進国へ行き、見る、聞く、感じるを体験させたいという思いもあり、昔から亀田では海外研修を実施している。しかし時代の変化もあり、海外研修が学生募集の面でマイナス要因になりつつあるのかなと思う。行くことで学びは大きいと考えるが、学内の学生にも同じ学びを担保することが難しい。(吉田副学校長)
- ・海外の病院に行くことは、個人では限界があり、現地コーディネーターがいてこそできる。行くことには大きな意味があって、日本の医療安全が100%ではないことや、取り入れたら良いことなど気づきや発見があり、得るものは大きい。病院のスタッフも行かせてあげたいと考える。しかし、金銭的問題は難しい。昔は学校で旅行代金の積み立てをしていたため、研修時の旅費の出費はなかった。学びの差をなくすのであれば、インターネットでつながりなどして、リアルな様子を見せるのはどうか。(安田委員)
- ・昔のように学校で積み立てをするのは難しいが、銀行の積み立て制度などを紹介するという方法はあるかと思う。(吉田副学校長)
- ・国内留学はどうか。神田外語大学を運営する法人が福島に開校しているブリティッシュヒルズであれば科目目標の1と3は実践できる。(大塚事務長)
- ・医療創生大学の学生が、外国籍の患者様への実習のためだけに亀田病院に来ている。海外事業部の方に医療システムや保険制度について説明を受け、病院で働く外国籍の方に話を聞いている。(安田委員)
- ・外国籍の患者様の人数も多くないので、患者様一人に対し学生2人で担当している。また日本に長く住んでいるため日本に慣れている人も多い。(栗田委員)

- ・鴨川市で ALT (外国語指導補助手) は雇用しているか。(吉田副学校長)
- ・市では現在、ALT の雇用はしていないが、国際交流課で外国の方を雇用している。(鈴木委員)
- ・お金をかけずに国際交流をする方法はないか。(吉田副学校長)
- ・海外研修は組織がきちんとした器を作っているから価値があり、学ぶことができる。(大塚事務長)
- ・旅行には行けるが、個人で病院や施設には簡単に行くことができない。(安田委員)
- ・海外旅行はこんなに安いのに、研修旅行はどうして高いのかという意見がある。(新井教育副主任)
- ・最少催行人数は何人ぐらいかも念頭に置く必要がある。(大塚事務長)
- ・大学と一緒に行くことはどうか。(安田委員)
- ・時期や目的等の違いはあると思うが検討したい。また、学生だけでなく、保護者への働きかけも重要と考える。海外研修を目的に入学する人は減ったが、研修旅行の良さを提示することは必要だと考える。(吉田副学校長)
- ・研修旅行に参加した学生は外的刺激を受け、考え方や態度、行動が確実に変わっている。(関根教育主任)
- ・教科科目ではあるが、経済面を考えると、世の流れでは選択科目となるのではないか。(吉田副学校長)
- ・現状、事実上の選択となっている。オンラインで繋ぐことやビデオ撮ってみせるのは良いアイデアである。(大塚学校長)
- ・研修旅行に参加した学生にはお金が発生していることなので、現地に行かなくても話が聞ける、見ることができるとなると、不公平だという意見が出るのではないか。(関根教育主任)
- ・現地に行かないと見ることができないものもあるので、提供する内容の取捨選択をしてみてもどうか。(安田委員)
- ・2 年生で研修旅行に参加するので、感動が印象に残ることが多いと思う。看護師と一緒に参加し、実習病院でも行っていることや日本の優れている面も話してくれると、より学びも深まるのではないか。(吉田副学校長)
- ・看護師が海外研修に同行し、見てきたことで参考になったものは、実際の現場で取り入れている。(安田委員)
- ・オーストラリアの医療を学んできたのは良いことだと思う。イギリス系は金銭面でシビアなことが多い。また日本のように初めから専門の診療科に行くことができず、総合診療から振り分けられ、希望する科目を受診することも難しい。日本の医療の良さも感じるのではないか。(大塚学校長)

まとめ

地域・在宅看護論について、今後の課題は地域住民との対話である。会話の場を意図的に設定し、また質問も QFT を取り入れて作成してみる。

外国語Ⅱについて、よりよい学びができ、また選択もできるような形で継続していける道を検討していきたい。

6. 次年度の予定

令和 7 年度第 1 回会議

令和 7 年 6 月 23 日 (月) 15 時から 16 時半

亀田医療技術専門学校 2 号館 3 階 301 教室